

## キリスト教宣教団の影響力：旧ゴールドコーストにおけるメソジスト宣教団の事例

著者	渡辺 和仁
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	31
ページ	235-246
発行年	2002-10-15
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00002017">http://doi.org/10.15021/00002017</a>

## キリスト教宣教団の影響力 旧ゴールドコーストにおけるメソジスト宣教団の事例

渡辺 和仁

東京都立大学大学院

キリスト教宣教団はその活動を通じて各地の植民地支配の確立に貢献した、という主張を耳にすることがある。宣教団は植民地住民にキリスト教を広め、かれらをより「治めやすい」存在へと変えていったという前提が、この主張の背後にあるといえるだろう。しかしながら、そもそも当時のキリスト教宣教団は植民地の現地住民や社会を変化させるだけの十分な力をもっていたのだろうか。この問題の検討は宣教団と植民地権力との関係を理解するうえで、有益な示唆をあたえてくれるであろう。

ただあらかじめいっておけば、宣教団と植民地権力との関係は時代や地域によって、大きな違いがあると考えられる。それゆえ、本論で取り上げる、19世紀前半の旧ゴールドコースト（現在のガーナ南部）におけるウェスリアン・メソジスト伝道教会の活動分析は、あくまでもひとつの事例研究にすぎず、今後さらなる比較史的研究が必要となるであろう。

18世紀末以来英国において、大西洋奴隷貿易に対する贖罪の意識が、ウェスリアン・メソジスト伝道教会だけでなく、他の多くの宣教団の設立をも刺激した。ロンドンに本部をおくメソジスト宣教団は、1835年にゴールドコーストにおける布教活動を開始した。それはちょうど、アフリカにおける奴隷制度廃止に向けた運動が英国内で活発となる時期と重なっていた。このように布教開始当初から、ゴールドコーストのメソジスト宣教団は二重の任務を担うこととなった。ひとつは現地住民をキリスト教化すること、もうひとつは現地の奴隷制度を廃止、もしくは廃止するよう努力することであった。いかにいえば、メソジスト宣教団は単に布教するだけでなく、ヨーロッパの基準にそって現地の住民や社会を「改善」してゆくことを期待されたのであった。奴隷制度の廃止は、ヨーロッパの基準に合わないものを取りのぞいて基準を満たすようにする、という意味で「改善」であり、また「文明化」の一例ということもできるであろう。

これらふたつの目的に対応して、ふたりの人物がメソジスト宣教団にかかわっていた。ひとりにはウェスリアン・メソジスト伝道教会の理事をつとめるジョン・ビーチャムである。かれは四人いる理事のうち、事実上の主席理事であった。もうひとりの人物は、下院議員であり著名な奴隷制廃止論者でもあった、トーマス・フォーウェル・バクストンである。バクストンはメソジスト教徒ではなかったけれども、1834年のメソジスト教

会の年次総会（年会）議長を務めるなど、メソジスト派と密接な関係を保持していた。ビーチャムもまた、バクストンが代表をつとめる「奴隷貿易廃絶とアフリカ文明化のための協会（The Society for the Extinction of the Slave Trade and for the Civilization of Africa 以下、廃絶協会）」に参加しており、両者は親しい関係にあったようである。しかしながら宣教団の活動の位置づけにかんして、かれらは微妙にことなる考えをもっていた。

アフリカの文明化とキリスト教化とにかんして、ビーチャムは以下のように記している。

もしも海外奴隷貿易が廃止されてゆく過程で、それと同時にアフリカの民衆一般の精神を啓蒙し、あたらしい原理にもとづいて現地社会を構築するために適切な手段がもちいられないならば、戦争が蔓延しつづけるだけでなく、そうした戦争が…毎年の慣習や祝祭的行事にいつそう多くの生けにえを供することによって、民族的な迷信にあらたな恐怖をつけ加えることになるであろう（Beecham 1968: 121）。

この記述の中の戦争にかんする言及は、大西洋奴隷貿易の影響でゴールドコースト社会に奴隷狩り目的の戦争が蔓延していたことを踏まえたものである。これをよんでみると、ビーチャムが、たとえ海外奴隷貿易の廃止といったような手段が採用されても、アフリカ人の精神が啓蒙されないならば、現地の状況が根本的に改善されることはないと考えていることがわかる。そしてビーチャムにとって「アフリカの民衆一般の精神を啓蒙する」手段とはキリスト教以外のものではありえなかったであろう。つまりビーチャムは、奴隷制度の廃止といったような、いわゆる文明化の手段よりも、キリスト教という宗教の方により大きな重要性を認めているといえるだろう。

ビーチャムの主張の特徴は、バクストンのそれと比較したとき、いつそうはっきりと理解される。バクストンはビーチャムとは対照的に、キリスト教よりも、アフリカ社会を積極的に「改良」する「文明化」の道を志向していた。たしかにバクストンは「あらゆる諸悪に対する完全な治療法はアフリカへのキリスト教の導入である」（Buxton 1968: 4）と認めている。しかしバクストンは以下のようにも語っている。

どれほどキリスト教の伸張が図られようとも、殺人や虐殺、またあらゆる正しい原理に対する違反がその地を汚しつづけているようなところよりも、平和が広くゆきわたり罪悪が減じられているところのほうが、はるかに容易にキリスト教が根を張り繁栄するであろう（Buxton 1968）。

つまりバクストンは、アフリカにキリスト教を根づかせるために、まずは実践的な「社会改革」が必要だと考えていた。この点がビーチャムの考え方と大きく異なっている。ビーチャムの主張はむしろ、文明化の諸方策を定着させるためにはキリスト教を広めて現地住民の精神を啓蒙しなければならない、というものだった。キリスト教の布教と「文明化」の実現と、どちらに重きをおくかという問題をめぐって、双方の考え方のあいだには相違があった。二人とも、キリスト教と「文明化」とが相補的であり一緒にアフリカに導入されるべきであると前提しながらも、実際に導入する際にどちらを重視するかという点で見解がわかれていたのである。もっともこのような見解の相違も、二人のあいだになら深刻な対立をひき起こすことはなかったようである。少なくともビーチャムはこの食い違いに気づいていたようだが、とくにバクストンの意見に反対の姿勢を示してはいない (Beecham 1968: 338-339)。しかしながら二人の意見の相違は、ゴールドコーストにおけるメソジスト宣教団の活動の進め方に少なからぬ影響を及ぼすこととなった。

ゴールドコーストのメソジスト宣教団は、活動をはじめた当初、派遣された宣教師がつぎつぎと病気で死亡する事態に見舞われた。継続的な活動がはじめられたのは、1838年に宣教師トーマス・フリーマンが着任してからであった。フリーマンは、布教活動を中止した1857年まで宣教団の中で指導的な役割を果たし、1873年に教団に復帰したあと、1890年に死亡するまで長期間にわたって現地で宣教活動に従事した。

フリーマンは、アフリカのキリスト教化と文明化とにかんして、当初はビーチャムに近い考え方をもっていたようである。というのも、フリーマンがロンドンのメソジスト本部に宛てて、次のような内容の書簡を送っているからである。その書簡によると、1838年の10月ころ、当時のゴールドコーストの中心地であったケープコーストの城塞付近の海岸に貨物船が難破し、現地の住民が船の略奪をはたらいた。フリーマンは現地民のメソジスト教徒がこの略奪に加わっているのではないかと危惧していたが、かれら全員が潔白であるとわかって安心し、以下のように手紙に書き記している。

しかしかれら (メソジスト教徒) は高潔を保ただけでなく、襲いかかる海賊からやっとのことでわずかばかりの財物を救いだし、次のように頼みながら、それらすべてをわたしの手におきました。「これらを当局者に渡してください。他人のものだとわかった財産を手元にとどめておくことは、神に対して罪を犯すことになると感じるのです。」このときのわたしの満足度はどれほど大きなものだったのでしょうか。この事実に対して、はじめに文明化、それからキリスト教化 (を進めよう) と議論する人々はいったい何というのでしょうか<sup>1)</sup>。

この手紙から、キリスト教を受容した現地住民が貨物船の財物を盗むどころか危険を

おかしでも守ろうとした事実には、フリーマンが驚き、感激したようすがうかがえる。フリーマンは、現地のメソジスト教徒が略奪に加担しなかったのはキリスト教のおかげだとみなし、その推定にもとづいて、アフリカ人がキリスト教を受け入れさえすれば略奪といった悪い行為には自然にかかわらないようになる、と考えているようである。逆に、キリスト教を布教する前に、なまじ「文明化」によって財物が社会にあふれたばあい、この事件のような略奪が横行してしまうかもしれない。それゆえフリーマンは、「最初に文明化、それからキリスト教化」という主張に異議を唱えたのであろう。略奪事件に対するフリーマンの見方の当否はべつにしても、少なくともフリーマンがバクストンではなく、ビーチャムに近い考え方をもっていたことは、この記述から理解されるであろう。

しかし1840年の6月から12月までの英国滞在中、バクストンの著作に触れるやいなや、フリーマンはそれまでの考え方を大きく変えたかのようにみえる。バクストンは西アフリカの奴隷貿易を根絶するために、ヨーロッパの農業技術をアフリカに導入して農業生産を拡大し、奴隷のかわりに、収穫した農作物を輸出する、いわゆる合法貿易の伸張をめざしていた。このようなバクストンの方針が、父親が園丁で、かれ自身も園丁の経歴をもつフリーマンにつよく訴えかけた（Birtwhistle 1950: 4）。フリーマンはバクストンの考え方に共鳴し、ゴールドコーストにおける活動のためにバクストンに援助を要請した。その際の手紙は次のように記している。

「奴隷貿易廃絶とアフリカ文明化のための協会」の趣意書を拝読し、わたしは感激いたしました。それと申しますのも貴協会の主な目的の一つが、実践的な農業科学をもちいて、最良の耕作様式や安定市場を確保する生産物についての有益な知識を提供したり、もっとも定評のある農具や種子を導入したりすることで、アフリカ人を勇気づけることだとわかったからです<sup>2)</sup>。

実際に1840年、廃絶協会はフリーマンからの援助申請に応え、多種類の農具の購入のために100ポンドの補助金をあたえた（Beecham 1968: 307-308）。このころから宣教師であるフリーマンは急速に農園事業へと傾倒していった。

メソジスト宣教団による農園事業の最初の試みは、1841年にケープコーストの北東20マイルほどのドミナシで開始され、コーヒーなどの商品作物が栽培された。この試みはゴールドコーストにあたらしい農業技術を導入するだけでなく、作物の売却利益を現地の宣教団の運営費用に充てることをも、もくろんでいた。1844年までにこの農園は1.5エーカーほどの耕作地を占めた。しかしこの農園は利益を生むどころかその運営経費が現地の宣教団の財政を圧迫し、メソジスト本部は現地の宣教団に対して農園事業

向けの支出を削減するよう指導した。実際に1846年には、本部からゴールドコーストの宣教団にあたえられた補助金が、前年の6,000ポンドから5,500ポンドへと削減された。そして最終的に1850年、併設されていたドミナシの学校運営は維持されることとなったものの、農園そのものは現地の首長に譲渡されることとなり、メソジスト宣教団によるドミナシ農園の運営は停止した (Bartels 1965: 68)。

このドミナシの農園のほかにも、フリーマンはケープコーストの北5マイルほどのブラーにおいて農園事業に着手していた。同じ時期、バクストンと廃絶協会とは、1841年に、西アフリカのニジュール川沿岸を調査する「ニジュール探検」を計画・実行した。この計画はニジュール川沿岸に農産物生産に適した土地を見い出して「模範農場」を設立し、その農場をともに運営する取り決めを現地の住民と結ぶことを目的としていた。そしてこの計画と連動して、ゴールドコーストのブラーの農園もバクストンから金銭的に援助を受ける手はずとなっていた。実際にニジュール探検隊の船団がニジュール川への途中でケープコーストにたち寄った際、廃絶協会の担当者がブラー農園を視察している (Metcalf 1962: 269)。

しかしながらこの探検は所期の目的を達成することなく幕を閉じることとなった。というのも探検の間に、白人の参加者150名あまりのうち130名が熱病に冒され40名が死亡し (Bartels 1965: 29)、「模範農場」にかんしても十分な成果を得られなかったからである。こうして「ニジュール探検」の計画は失敗し、廃絶協会によるブラー農園に対する援助計画もたち消えとなった。

本来であれば、この時点でメソジスト宣教団によるブラー農園運営の道は閉ざされたはずであった。先のドミナシの例からも知られるように、英国のメソジスト本部は布教活動と直接に関連しない農園事業に多くの資金をつぎ込むことに反対していた。それにもかかわらずフリーマンはブラー農園の運営継続をほとんど独断で決定してしまったのである。

フリーマンが、ブラー農園への援助が不可能という旨の連絡をバクストンから受けたのは1842年の2月頃と考えられる。そのとき既にブラー農園の土地100エーカーをメソジスト宣教団が購入する手続きがほぼ終了していた<sup>3)</sup>。このような事情もあってか、フリーマンは「たとえメソジスト伝道協会本部がこの点にかんしてわたしが誤りを犯していると考えたとしても」ゴールドコーストの宣教団と信徒の利益のために (信徒の中には農園事業の本格化をもとめる声があった) ブラーの農園事業を継続すると声明した<sup>4)</sup>。具体的には購入を予定していた土地を年額30ポンドで借り受ける契約を結び、当初は年俸150ポンドで農園の管理に充てることにしていたヨーロッパ人のかわりに、学校の教師の職にある信徒を年額35ポンドで雇い、また農園ではたらく労働者の数を30名に削減するなどして運営経費をおさえ、なんとか農園事業を継続しようとフリーマンは画

策した。こうした処置によって農園事業にかかる費用は年額200ポンドを超えない、とフリーマンは見積もっている<sup>5)</sup>。1842年の英国下院委員会におけるビーチャムの発言によれば、この200ポンドという金額はおおよそ宣教師ひとり分の年間給与に匹敵する<sup>6)</sup>。つまりフリーマンは、200ポンド程度の支出であれば、自分の給与とその他の収入とをつぎ込めばどうにかブラーの農園事業を進めてゆくことができると考えたのかもしれない。しかしながら当時ゴールドコーストのメソジスト宣教団の議長であったフリーマンは、本部からの補助金や信徒から集めた寄付金などを管理する立場にもあり、事実上フリーマン個人の給与と宣教団の運営費とは厳密に区別されることなくいわば「公私混同」のかたちで使われていたという (Bartels 1965: 71)。

ともかく、このようなかたちではあるが、ブラーの農園事業がメソジスト宣教団の管理のもとに本格的に進められた。この農園では、綿やウコン、オリーブ、蔓(つる)植物(具体的に何を指すかは不明)、コーヒー、トウモロコシなどが栽培された。またこの農園事業と連動して教会や学校がブラーに設立され、信徒が仕事に向かう前に教会で礼拝がおこなわれたり、午前中に学校で勉強した生徒が午後2時間ほど農作業に従事したりするなど、農園を中心としてひとつの共同体が成立していたという (Bartels 1965: 70)。

フリーマンはじめ他の宣教師も農園事業にたずさわり1850年代に入ってもブラー農園は継続した。しかしこの農園だけでなくゴールドコーストのメソジスト宣教団全体の収支が大きく悪化していき、宣教団が多額の借金を抱えるにいたった。このため英国のメソジスト本部はフリーマンから会計管理の権限を剥奪し、別の宣教師を派遣してその任にあたらせた。この措置が直接の引き金となり、1857年9月にフリーマンはメソジスト宣教団から離れ、宣教職を辞することとなった(その後かれは1873年までアクラで行政官としてはたらいた)。ブラー農園もまたフリーマンの離脱後、宣教団による運営が放棄された。

これらの農業振興にくらべ、キリスト教宣教団の設立そのものにより密接に結びついていた奴隷制度廃止に向けた試みも、少なくともゴールドコーストのメソジスト宣教団においては、顕著な効果をあげることなく、むしろやむやのうちに終息してしまった。

メソジスト教会を設立したジョン・ウェスレイ自身、奴隷制度に対する反対の姿勢をはっきりと示しており、ビーチャムも「あらゆる形態の奴隷制度がキリスト教の精神と教えとにまったく反するというを明らかにするために」福音の原理を維持するようゴールドコーストの宣教師たちに通知している<sup>7)</sup>。しかしながら実態として宣教師たちは、本部の指導に則した行動をとっていたとはいえない。

たとえばメソジスト宣教団の信徒の中にも奴隷身分の者がいたが、宣教師はその奴隷

を奴隷主の虐待から十分に保護することさえできなかった。1842年3月8日付の、宣教師シップマンからフリーマンに宛てられた書簡の中に、そうした事例をみて取ることができる。この書簡によれば、当時ゴールドコーストにおいて有力な貿易商人であったバンナーマン（スコットランド人の父とアフリカ人の母をもつ）が、かれの奴隷でありメソジスト教徒でもあったトムスン（桶職人）らに虐待を加えた。この事件のもう少しくわしい経過は以下のものである<sup>8)</sup>。ある日バンナーマンが外へ出てみると、かれの奴隷のほとんどが仕事を放り出してどこかへ行ってしまったことに気づき、仕事に戻ってきたトムスンらふたりのメソジスト教徒の奴隷を、十分に事情を聞くこともせず縛ってつるし上げ、むち打つなどの折檻を加えた、というものだった。こうした虐待も当時の奴隷制度に付随する問題のひとつであり、しかも信徒が直接の当事者であることを考慮すれば、メソジスト宣教団の宣教師が、奴隷を保護するために積極的にこの件に介入したとしてもさして不思議ではないであろう。しかしながら宣教師がバンナーマンに対してとった実際の対応は、きわめて慎重、むしろ「弱腰」なものであった。

この事件を伝え聞いたアクラ在駐の宣教師シップマンは、バンナーマンが信徒の奴隷に虐待を加えており、そのうえ信徒奴隷の礼拝参加を妨害するなどメソジスト教会に日ごろから批判的であるので、フリーマンがかれに手紙を書いて「遺憾の意」を伝えるべきだ、と先の手紙の中で進言している。シップマンは、宣教団のリーダーであったフリーマンを介し、しかも口頭ではなく手紙という間接的手段でバンナーマンに注意をあたえることを提案している。少なくともシップマンの書簡からは、みずから積極的に奴隷を保護しようという姿勢をみて取ることにはできない。

このような宣教師の姿勢には、アクラのミッションハウスがバンナーマンから賃貸されていたという事情も影響しているかもしれない<sup>9)</sup>。当時ヨーロッパ人にとって快適な建物はさほど多くなかったと考えられる。もしもこの件でバンナーマンと決定的に対立してミッションハウスの返還をもとめられた場合、メソジスト宣教団はアクラでの活動に支障を来すことになったかもしれない。それゆえこの件をめぐる宣教団の慎重な姿勢を理解できなくもないが、いずれにせよゴールドコーストのメソジスト宣教団が、奴隷制度に深くかかわる問題に直面しても、何ら有効な措置を講じられなかったことに違いはないであろう。

このような事情に加えて宣教師以外の現地在住ヨーロッパ人の動向も、奴隷制度に対して宣教団がとりうる選択の幅を制約した。

たとえば全員ではないにせよ、現地在住の英国人商人自身が多数の奴隷を所有するという状況があった。1841年初頭に死亡した商人ハンセンは生前300名とも600名ともいわれる奴隷を所有していたという（Metcalf 1962: 259）。ハンセンがどのような形態でまたどのような事情で多数の奴隷を所有していたのかは不明であるが、英国人による奴



隷所有の存在はたしかであったろう。宣教師チャックレイの書簡にもヨーロッパ人商人が奴隷を所有していたことを示す記述がある<sup>10)</sup>。これらは極端な例であるけれども、みずからが奴隷を所有するにはいたらぬまでも、現地の奴隷制度の性急な廃止には反対するというのが、おおよその在住商人たちの見解であった。というのも、ゴールドコーストの交易拡大や行政的職務の執行のため設けられ、現地在住の商人を中心に構成されていた「商人評議会」が、奴隷制度の急激な廃止は現地社会の混乱をもたらすとして、反対の姿勢を示していたからである。社会の混乱は交易伸張の妨げとなると考えた商人評議会は、奴隷制度の廃止に慎重な態度をとっていた。当時のゴールドコーストにおいてヨーロッパ人の在住者はせいぜい数十名ほどと予想され (Fage 1955: 109), そうした小さな集団の中で多数を占める商人たちの意向に反して、宣教師たちが声高に奴隷制度の廃止を訴えることはきわめて困難であったろう。またゴールドコーストのメソジスト宣教団は商人評議会議長マクリーンをはじめとして多くの商人から寄付を受けており、資金面からも教会建設などの資材調達の間からも、かれらとの関係を悪化させることは許されなかった。これらの理由からメソジスト宣教団は、当初期待されたような奴隷制度廃絶に向けた取り組みに本格的にのり出すことはできなかったのである<sup>11)</sup>。

ゴールドコーストのメソジスト宣教団は、宣教開始直後から、布教活動だけでなく、農業振興や奴隷制度廃止といった「社会改革」あるいは「文明化」と深くかかわる活動にも着手した。しかしながら農園事業にかんしてはフリーマンの独断専行という側面が強く、運営経費もかさんだため、宣教団からフリーマンが離脱してあとは、メソジスト本部の意向にしたがって農園の運営は放棄された。奴隷制度にかんしても、性急な奴隷制廃止に反対（つまり事実上の現状維持）していた商人評議会との関係上、宣教団が積極的に行動することは困難であった。さらに、農業振興を通じた奴隷制度の廃絶というバクストンの路線と訣別し、そのうえで「伝道協会として、家内奴隷制という巨大な害悪に対抗するために我々の手に残されているものは、道徳的な手段のみ」<sup>12)</sup> だと言明したメソジスト宣教団にとって、できることはあまり残されていなかったであろう。そもそも現地の奴隷制度は道徳的な問題というよりもむしろ、社会的・経済的な意味をもつものであった。それゆえ「社会改革」、「合法貿易の拡大」などを通じた奴隷制度廃絶を唱えるバクストンの考え方も的はずれとは言いきれない。それはともかくとしても、メソジスト宣教団は現地の経済や社会構造に直接的に関与する道を捨て、オダムッテンが言うように、信徒の魂の救済のみに活動を限定してゆく方針を選択したのであった (Odamtten 1978: 128)。見方を変えれば、メソジスト宣教団は、費用も時間もかかり、宣教師の多大な労働を強いる、厄介な「社会改革」から手を引くことを望んでいたとも考えられるだろう<sup>13)</sup>。こうしてメソジスト宣教団は活動の比重を、もともとビーチャムが主張していた「キリスト教化」へと大きく傾けてゆくのであるが、その「キリスト教

化」の実態は一体どのようなものだったのだろうか。以下に概観してみよう。

1835年、メソジスト伝道協会がゴールドコーストにおいて布教活動を始めたのは、英領城塞内で聖書研究会を組織していた現地のファンティ人からの招請がきっかけであった。それゆえ宣教師たちは活動当初からこれらの現地民の援助を仰ぐことができ、あいつぐ宣教師の死に際しても、宣教団はある程度の活動の継続性を保つことができた。

宣教団はゴールドコースト「地区（宣教団の用語）」を活動領域とし、「地区」はさらに「巡回説教区」に分けられ、中でもケープコーストやアノマブのそれが中心的な位置を占めていた。巡回説教区の中にはいくつかの教会や礼拝所、学校等があり、その周辺に「クラス」という20名ほどの男女別の集団が形成された。それぞれのクラスには「クラスリーダー」がおり、そのリーダーが中心となって定期的にクラスミーティングが開かれたり、教会で礼拝が執行されたりした。少なくとも1840、50年代ころは、ケープコースト、アノマブ、アクラといった主要な教会では、毎週日曜日の午前6時、午後3時半、午後7時の3回、礼拝がおこなわれ、各回の説教を宣教師たちが予定表にしたがって担当した。より小さな教会が分散している巡回説教区においては、担当のヨーロッパ人宣教師や現地民の補助員たちが分担しあって、今週はA村とB村の教会とを、来週はC村とD村の教会とをおとずれる、というようなかたちで説教をおこなった。宣教師の説教は英語でおこなわれ、現地言葉に翻訳された。ただ活動を開始してまもないころは、十分な数の現地人通訳を確保することは困難であった。

このような宣教団の活動を通じて得られた信徒の数は、毎年メソジスト本部に報告された。1850年代末までにかぎってその数字をまとめてみると、表1のようになる。

この表からわかるように、もっとも古い1842年の報告書によると信徒数は700名あま

表1 メソジスト宣教団の信徒数<sup>14)</sup>

年	信徒数 (人)	年	信徒数
1840	—	1850	745
1841	—	1851	740
1842	711	1852	925
1843	752	1853	994
1844	711	1854	1,054
1845	720	1855	1,231
1846	854	1856	1,651
1847	—	1857	1,645
1848	825	1858	—
1849	—	1859	1,413

りであった。1850年代なかばに信徒数は漸増し1,600名を超えるものの、1869年にいたっても1,578名であり、長期間、信徒の数は1,500名前後に留まった。しかもこの間、教師やレンガ工、大工など宣教団関連の仕事に従事する者やその家族がメソジスト教徒の多くの部分を占めていたという (Cruickshank 1966: 72)。宣教団関連の仕事をする者がキリスト教に「改宗」するのは布教開始当初からの傾向であったが、クリュックシャンクの記述はこれを裏づけるものと考えられる。いずれにせよ当時の布教活動は現地社会に広く浸透していたというよりもむしろ、より限定的で閉鎖的な集団の内部にとどまっていたといえるだろう。このような宣教団の性質が大きく変容し、メソジスト教徒の数が急激に増加するのは1870年代なかばを待ってからのことである。しかしながらこの点については稿を改めて論じることとしたい。

これまで見てきたように、ゴールドコーストのメソジスト宣教団は、積極的に現地住民・社会に関与しその「変革」を目指す「文明化」の路線を放棄し、活動分野をキリスト教の布教活動そのものへと限定した。そのうえ布教活動を通じて得られたメソジスト教徒の数も1850年代なかば以降は伸びなやみ、ゴールドコースト社会全体におよぼす影響力という点で、メソジスト宣教団の存在はさして大きくはなかったと考えられる。このように考察してみると、少なくとも当時のゴールドコーストにおいては、宣教団が植民地支配の確立に貢献できるほどの力を持っていたとは考えにくいであろう。たしかに現地の奴隷制度をめぐる、メソジスト宣教団は商人評議会の方針に追従したのであるが、それは、商人評議会が既に現地に確立していた統治を乱さないためにとられた措置という性格がつよく、宣教団の活動が商人評議会による統治の確立にあらたな要素をつけ加えたものとはいえない。やはり植民地化において宣教団が及ぼした影響力については、今後、慎重に検討してゆく必要があるのではなかろうか。ただ改めて述べておけば、ここで取り上げたメソジスト宣教団はひとつの事例にすぎず、ある時代・地域によっては植民地権力とキリスト教宣教団とがより密接に連動して植民地統治に関与した事例も数多く存在していただろう。それゆえ、多様な事例を性急にひとつの枠組みに還元してしまうことなく、ひとまず個々の事例を洗い出し、比較してゆく作業がこれから重要になると思われる。

## 注

- 1) Wesleyan Methodist Missionary Society (WMS) Correspondence (Gold Coast), box no.258, Freeman, Cape Coast Castle, 19. Oct. 1838.
- 2) WMS Correspondence (Gold Coast), box no.258, T. Freeman's application to Sir T.F. Buxton, Jul. 1840.
- 3) WMS Correspondence (Gold Coast), box no.258, Freeman, Cape Coast, 9. Sep. 1841.
- 4) WMS Correspondence (Gold Coast), box no.259, Freeman, Cape Coast Castle, 9. May. 1842.
- 5) WMS Correspondence (Gold Coast), box no.259, Freeman, Cape Coast, 17. Apr. 1842. この書簡の中でフリーマンは、農業の振興を図ることが「アフリカを文明化するというバクストンらの計画を実現するための最も有効な手段の一つであったのに」という嘆きとも受け取れる言葉を記している。
- 6) Report of Parliamentary Committee of 1842, Rev. J. Beecham, Q.3611. ビーチャムによれば、当時のメソジスト伝道教会において、単身の宣教師の年間給与は150ポンド、既婚で子供が2、3人いる宣教師のそれは250あるいは300ポンドであったという。ちなみに聖職復帰後の宣教師フリーマンの年間給与は、1870年代においてちょうど200ポンドであった。WMS Synod Minutes, Gold Coast district reports, general account for 1879.
- 7) WMS Correspondence (Gold Coast), box no.258, 1835-1841, Instructions to Rev. Freeman and others in Gold Coast and Ashantee.
- 8) WMS Correspondence (Gold Coast), box no.259, Shipman, British Accra, 8. Mar. 1842.
- 9) WMS Correspondence (Gold Coast), box no.258, Memorandum of agreement for Dwelling at British Accra, British Accra, 15. Mar. 1841.
- 10) WMS Correspondence (Gold Coast), box no.258, Thackray, Dec. 1840.
- 11) このような奴隷制度に対する妥協的な姿勢は、宣教団の豊富な資金（現地の人々と比べて）とあいまって、宣教師が奴隷の主人のような性格を持つ状況を生み出すに至った。詳細に関しては渡辺（1999）を参照されたい。
- 12) Report of Parliamentary Committee of 1842, Rev. J. Beecham, Q.3656.
- 13) 並河氏は1880年代、ニジェール川流域で活動したチャーチ・ミッションナリー・ソサエティー（CMS）において、「『キリスト教的価値観』に基づいた社会改革を目指すものから、改宗者個人の信仰の在り方を重要視するものへという」活動方針の転換がなされたと指摘している（並河 1996）。これは1840、50年代のメソジスト宣教団の方針の変化と比較して興味深い。ただ並河氏はこの変化の要因を、当時の人種観の変化を受け、教会指導者が以前ほどアフリカ人の「文明化」の能力に信頼を置けなくなったためとしているが、本論で触れたように、多大な時間・金・エネルギーを必要とする「社会改革」は宣教団にとって荷が重く、むしろ「改宗者」の「魂の救済」に活動を限定した方がはるかに負担が軽いという事情を考慮すべきであろう。負担の大きい「社会改革」を中止し「魂の救済」に活動を限定することを正当化するために、「劣等なアフリカ人」という人種観が利用された、という逆の推測は成り立たないであろうか。1880年代における CMS の方針転換を、現地での具体的な布教活動との関連で捉える研究を並河氏に期待したい。なお1880年代の CMS の宣教師数増加に関して、Clarke (1986) が参考文献として挙げられる。
- 14) WMS Synod Minutes, Gold Coast district reports, box no.266-267, from 1842 to 1859.

## 文 献

Bartels, F.L.

1965 *The Roots of Ghana Methodism*. London: Cambridge University Press.

Beecham, J.

1968(1841) *Ashantee and Gold Coast*. London: Dawsons of Pall Mall.

Birtwhistle, A.

1950 *Thomas Birch Freeman*. London: The Cargate Press.

Buxton, T.F.

1968(1839) *The African Slave Trade and its Remedy*. London: Dawsons of Pall Mall.

Clarke, P.B.

1986 *West Africa and Christianity*. London: Edward Arnold.

Cruikshank, B.

1966(1853) *Eighteen Years on the Gold Coast of Africa*. vol.1/2. London: Frank Cass & Co. Ltd.

Fage, J.D.

1955 The Administration of George Maclean on the Gold Coast, 1830-1844. *Transactions of the Ghana Historical Society* 1(4): 104-120.

Metcalf, G.E.

1955 After Maclean. *Transactions of the Ghana Historical Society* 1(5): 178-192.

1962 *Maclean of the Gold Coast*. London: Oxford University Press.

Odamtten, S.K.

1978 *The Missionary Factor in Ghana's Development 1820-1880*. Accra: Waterville Publishing House.

Reindorf, C.H.

1951(1889) *The History of the Gold Coast and Asante*. Basel: Basel Mission Book Depot.

永原陽子

1987/1988 「トーゴ植民地化における『商業とキリスト教』(上)(下)『千葉史学』11: 58-78, 12: 89-116。

並河葉子

1996 「西アフリカにおけるチャーチ・ミッションナリー・ソサエティーの活動とイギリス福音主義」『西洋史学』181: 17-34。

渡辺和仁

1999 「隷属民と宣教師—19世紀中葉のガーナにおけるメソジスト宣教団の活動に関する考察」『アフリカ研究』54: 19-34。